

## 口頭発表「教員養成課程における学校飼育動物に関する授業実践」

後藤太一郎



## 1 はじめに

生き物に関する幼少期の教育では、1) 様々な動物に関心をもたせる、2) 身近な動物を飼育する、3) 動物の体のつくりや仕組みについて関心をもたせるという3つが基礎となる。これらの指導が学童期で段階的に行われることで、生き物との付き合い方や正しい生命観の形成につながるだろう。したがって、幼稚園や小学校の教員は、自ら生き物に親しみ、生き物について指導できる力が要求される。

しかし、大学の教員養成課程では、動物の飼育法や人と動物の関係についての講義は一般的ではないようだ。筆者は小学校教員免許取得に必要な理科の授業科目として担当している授業の中で、理科で扱う教材動物の飼育や観察のポイントを解説する他に学校飼育動物に関する講義を行っている。最近は、獣医師や家庭犬インストラクターにウサギやニワトリなどの学校飼育動物や犬との接し方について講義を依頼している。

ここではこの授業について紹介し、教員養成課程における学校飼育動物に関する講義の必要性を述べる。

## 2 教員養成課程における生き物についての指導

大学の小学校教員養成課程では、動物飼育や人と動物の関係を扱った授業の実施状況は極めて低いようだ。これまでに実践が報告され、現在も実施されている授業としては、群馬大学教育学部における「生活科」と新潟大学人間科学

部における「生活科教育法」があり、獣医師によって動物飼育に関する講義が行われている（桑原、2003；宮川、2006）。これらは半期15回の授業として行われているが、ここまで時間を見てはいるにしても、生活科の授業科目の中で学校飼育動物に関する内容に触れることが多いと思われる。

理科の授業科目でも、教材生物として昆虫や魚類の飼育を指導する例は多いだろう。しかし、小学校理科の指導要領の中に、「生物を愛護する態度、生命を尊重する態度を育てる」という目標がある以上は、小学校教員免許の取得に関する理科の授業の中では動物飼育について取り扱うことが必要なはずだ。

小学校教員免許1種を取得するために必用な理科の単位数は、教科に関する科目としての「理科」1単位と、教職に関する科目として「理科指導法」など2単位の合計3単位である。教科に関する科目「理科」では、小学校理科の教育で必要な、自然に親しみ探求するための基本的な考え方と方法について理解を深めることを目的として、物理、化学、生物、地学の各領域から学習テーマを選び、1領域3回ずつ、実習を中心とした授業を行うのが一般的である。

三重大学教育学部の場合では、授業科目名は「小学校専門理科Ⅰ」と「小学校専門理科Ⅱ」が半期（30時間）で前後期に各2コマ開講しており、学生はいずれか1単位を履修すればよい。扱う分野は、Ⅰでは物理・化学、Ⅱでは生物・地学であるため、Ⅰを履修した学生は生物・地学を学習しないことになる。このように理科の履修単位が減少したのは平成11年度から免許法が改訂され、教職に関する科目の履修単位が増加したことによる。本学部では小学校と中学校の両方の免許取得を卒業要件としているが、中学校理科の免許を取得する学生以外は理科をほとんど大学で学習しないことになる。

中川により学校飼育動物の重要性が指摘されるようになってから(<http://www.vets.ne.jp/~school/pets/>)、小学校教科理科で生物愛護や生命尊重を教えるためには、動物学に関しては以

下のような内容を扱うことが必用だと考えている。

- ① 理科で扱う小動物（昆虫や魚類）の活用法
- ② 野生生物保護や外来生物規制法
- ③ 学校飼育動物の意義や動物愛護管理法
- ④ 人と動物の関係（動物介在教育、動物介在活動など）

筆者が担当する「小学校専門理科Ⅱ」では授業回数を6-7回とれるため、このような内容をある程度時間をかけて扱うことができる。

### 3 授業内容

小学校理科の生物分野を教える上では、自ら生き物に親しむ経験と、それを生かした教材開発の力が要求される。2001年度からは、私が担当している「小学校専門理科Ⅱ」では、児童に人気があり、小学校で扱うことの多い小動物について「飼育と観察」のポイントと、それを使って何を教えることができるかについて解説している。取り上げている動物は、ザリガニ、カブトムシやクワガタムシ、メダカや金魚など、教室内飼育が容易なものである。研究室で育てたこれらの小動物を授業にもついていき、学生にはそれらに触れて、観察・スケッチをしてもらう。体のつくり、雌雄の区別、飼育方法をはじめ、どのような学習内容を教える上で使えるか、これらの動物の教材としての利点や取り扱い、また、野生生物保護や外来生物規制法にも関連させる。

人と動物の関係についての指導は、2002年度からはじめ、アニマルセラピー、動物愛護法、および学校飼育動物の意義などを解説しながら、動物介在教育の重要性を述べている。ニワトリの話をする場合には、自宅で飼い始めたニワトリを授業に連れていく。よく人に慣れたニワトリに触れることで、これまでニワトリに恐怖心を持っていた学生の見方が大きく変わる。さらに2005年度からは獣医師による講義も1回お願いし、獣医師からみた学校飼育動物の現状や、ウサギやニワトリの健康状態を知るポイントについて指導を受けている。

また、人と動物の関係について講義を行う過程で、子どもが最も好きな動物である犬についても取り入れる必要性を感じてきた。犬は学校飼育動物としては不適切であるため、いかに学校教育の中で扱うかという課題はあるものの、

犬の行動を理解して、正しい接し方を子どもに教える必要があるはずだ。このような理由で3年前から犬を飼い始め、犬のしつけ教室に通った。しつけ教室での体験は教員養成系の学生にも有意義であると思ったことから、本年度より家庭犬インストラクターに1回の授業を依頼した。

この授業の課題としては、飼育体験としてザリガニを採集して最低1ヶ月間は飼育し観察記録をつけることと、授業を受けて学校飼育動物をどのように考えるようになったかレポートにまとめるものとしている。これらを通じて、教室内飼育の容易な動物について理解を深め、ていねいに飼育できるようになることと、学校飼育動物の意義について自分の考えをもつことを目標としている。

### 4 受講学生について

受講生は主に2年生と3年生で、教室の関係上50名に受講者制限をしているため、過去3年の受講者数は144名である。1学年のおよそ1/4が受講していることになる。本年度からは後期も開講するので、さらに受講者は多くなることが期待される。受講生には、最初の講義時に動物飼育体験等に関するアンケートをとっている。約9割の受講生は動物を好きであったが、これは動物を嫌いな学生は受講しないことにもよるだろう。受講生の動物飼育経験をみると、約半数が犬と魚類をあげていた。犬が約5世帯に1頭の割合で飼育されていることを考えると、犬の飼育経験者が多いと言える。しかし、ウサギやニワトリなどの学校飼育動物についての経験を尋ねると、飼育体験はあるものの、印象はよくない。これは飼育係や当番が世話ををするだけで、触れ合う機会がほとんどなかったからのようだ。

課題としたザリガニの飼育についての受講生の反応は、まず、この課題を出すと、いやな表情をする学生が必ずおり、最低でも1ヶ月は飼育するように言っても、1ヶ月間飼育したのは約半数ほどである。しかし、仕方なく始めた学生でも、「ザリガニの飼育という課題を聞いて憂鬱だったが飼っていると可愛くなり、大切にした」、「最初は気持ち悪かったが、面白く、癒しが得られた」、「初めて生き物を飼ったので不安だったが、試行錯誤し、愛情を注いだ」、「教員を目指す自分にとって重要な体験となった」と、

動物飼育を苦手としている学生には、飼育を見直す機会となっているようだ。

ザリガニの飼育体験や虫や魚の話で学生に最も伝えたいことは、小学校で担任になったら動物への興味関心を高めるように教室内飼育をしてほしいということだ。“教室生き物ワールド”(<http://ikimono.ciao.jp/>)では、子どもたちと教室内飼育する上で、以下のような合い言葉があげられている。

「この教室に連れてこられたときはがっかりだったけど、住んでみるとわりといいところじやん」と、生き物に言わせよう！

このためには、動物を理解しようと努めることが欠かせない。将来教員を目指す学生には、心にとめてほしい一言で、この講義を通じて感じてもらいたいと思っている。

## 5 獣医師による講義

過去2年は、筆者がニワトリ飼育でお世話になったことがあり、津市内で小学校の学校飼育動物の様子について詳しい獣医さんにお願いして、教師になったらどのように学校飼育動物を扱うべきかについて講義していただいた。学生にはとても好評であったが本年度はご都合がつかず、三重県獣医師会に依頼した。紹介された三重県四日市市のすどう動物病院長の須藤和信先生には、獣医師からみた学校飼育動物の意義と、犬についてのお話をお願いした。

学校飼育動物の重要性についてのポイントは以下の3点をあげられた。1)子どもたちは動物を抱っこすると嬉しいこと、2)触ることで愛情が育まれるので、触るという行為が必要であること、3)学校飼育動物はストレスをかかるため寿命は半減するが、動物愛護と切り離して、子どものためにいかに利用するか考えるべきだということ。3点目は、多くの学生にとってとても新鮮だったようだ。また、最後に、教員になって学校飼育動物の活用を実際にやろうとしたときには獣医師に相談するべきだという助言は、学生にとって、獣医師に協力を求めることへの敷居を低く感じさせることになったと思われる。

学生の感想をいくつかあげると以下のようであつた。

- ・小学校時代の飼育委員会でのいやな体験から学校飼育動物がいることによって逆に動物嫌

いになり、学校飼育動物などいない方がいいと思っていたが、獣医さんの話を聞いた1時間半で、長年の考えは180度変わった。

- ・学校飼育動物の意味を考えたことがなかったが、触らせることの重要性、動物の立場でなく、子どもの教育に活用することを聞いて納得した。
- ・教師は子どもたちに動物の気持ちを考えさせ、どうしたら動物にとっての負担を減らせるか教えていくことだと思う。

学校飼育動物は動物虐待につながると考えていてが全くかわったという感想も多く、教員を目指す学生にとってたいへん意味のある講義であった。

## 6 家庭犬インストラクターによる講義

筆者が通った犬のしつけ教室の指導者である越哲生氏は、しつけ教室だけでなく、小学校で2年生を対象とした訪問活動を実施されているため、動物介在教育についても詳しい。そのため、いつかは講義をお願いしようと考えており、本年度それが実現した。講義では動物介在教育や実施されている訪問活動プログラム(年に5回)について概説され、訪問活動プログラムの第1回目として行われている「咬傷事故防止プログラム」が行われた。このプログラムでは、犬に対してすべきこととしてはいけないことを、アシスタント2名と飼っている犬の協力により、学生は犬とあいさつして触れ合うことで学んだ。学生の感想としては以下のようなことがあげられていた。

- ・犬を飼っていても、犬への近づき方、さわり方を知らなかつたが、犬と触れ合うときのマナーがわかつた。
- ・子どものときに飼い犬にかまれたわけがわかつた。
- ・犬を飼う場合は責任をもつて大切に育てなければならぬと思った。
- ・子どもの安全を守り、犬と人との良い関係を築いてもらうために、今回のことしつかり覚えておく。
- ・犬の教育と人の教育も共通することがわかつた。
- ・言葉を理解できない相手とのコミュニケーションの取り方や、相手の気持ちを考えることにつながると思った。

## 7まとめと課題

この授業で、学生は学校飼育動物に対する考え方方が大きく変わったようだ。この授業の課題の一つである学校飼育動物を教育にどのようにいかしたいかというレポートから、以下のような感想や意見があった。

- ・動物との関わりの中で、子どもが様々なことを学べるように責任を持って動物を飼育できる教師になりたい。
- ・生き物と触れ合うという経験はそれだけで学ぶことがたくさんあることを感じた。それを支援するのは教師の役目だと思うようになった。
- ・学校飼育動物を扱った「命の教育」に興味を持ち、教師になったら力を入れて実践したい。
- ・獣医師との連携や、他の教員と協力し、学びを深めていきたい。

受講生の家庭での飼育体験はあるものの、学校飼育動物について良い体験をしていない学生にとって見方を大きく変えるもので、学校飼育動物を積極的に取り入れようとする学生が多い。学校飼育動物について深く考えたことがないまま教員になった場合、実際に学校で動物を活用するとは思えない。学校飼育動物の重要性を、教員養成の段階で教える必要性は高いと言える。

この授業科目では小学校理科の生物分野を指導する上で必要な内容に限らず、飼育を通じて動物を理解しようとする態度を育てることを目的として少しづつ改善してきた。受講生には、教員になったときには、クラスで動物を飼うこ

### 【質疑応答】

#### <中川>

玉川大学の竹内先生は、教員になる学生たちに、やがて学校で動物と接するだろうから、度胸を培うという意味で、ハムスターを飼わせているということをされていました。生物の教育の目的は、自分自身を理解するということも大きな目的ではないかと思うのですが、その点ではほ乳類が最適だと思います。継続して飼育させても、幼稚園の子どもでも2ヶ月たたないと変わらない、4年生くらいだと半年くらいで理解してきます。

そういう意味で、先生のところの学生さんに温血動物を飼わせるという計画はありますか。

#### <後藤>

できればそのようなことをしたいと思っていますが、できるだけ多くの学生に飼育体験をさ

とがふつうであるという意識をもつようになってほしい。多くの幼稚園や小学校でハムスターやモルモットなどの小型哺乳類を飼育している状況を考えると、学生にもこれらの動物を継続して飼育する体験が必要かもしれない。

学生による授業評価も良いことから、この内容を継続するとともに、希望者には、学校飼育動物がいい状態で取り入れられている小学校や、犬の訪問活動を見学する機会を設けるなどの改善を図っていきたい。また、学内の他の分野の教員、例えば幼児教育や特別支援教育を専門とする教員とも連携しながら、教員養成課程では動物介在教育に関する授業の実施を検討する必要があると考えている。

### ＜参考文献＞

桑原保光 (2003) 教員養成学部での「人と動物の関係」の指導. In: 学校飼育動物と生命尊重の指導, 鳩貝太郎・中川美穂子 (編). pp. 142-145, 教育開発研究所.

宮川保 (2006) 教員養成課程での飼育指導. In: 学校・園での動物飼育の成果, 全国学校飼育動物研究会(編), pp. 171-174, 緑書房.

「学校飼育動物を考えるページ」

<<http://www.vets.ne.jp/~school/pet/>> (2001/5/23アクセス)

「教室生き物ワールド」

<<http://ikimono.ciao.jp/>> 2001/5/23アクセス)

(三重大学教育学部理科教育講座教授)

せたいと考えています。ほ乳類の飼育になると、やる気のある学生だけを選んで飼育させるということになると思います。そうではなくて、全員に飼育体験をしてほしいと思ったときに、ほ乳類を飼うようにと学生に言うことは、今の段階ではできません。

#### <大阪・浅井>

大阪教育大学の大学院生です。

お話の中に「生命観」という言葉が出てきましたが、命の重みということを考えると、ほ乳類でも害虫といわれてすぐに殺されてしまうゴキブリでも、同じ命をもっていると思います。そのことについてどのようにお考えでしょうか。

#### <後藤>

やはり、基本的に人の生活に害を与えるようなものは排除しなければならないと思います。それは仕方のないことで、何でもかんでも生き

物に対して愛情を持てということは不可能だと思いますし、排除すべきものは排除していくかないと私たち自身が生きていくことができません。

<中川>

命の重みというものは、人から教えられて理解するものではなくて、それが自分にとってどのような意味をもつかということだと思います。そのような場面に立ったときに、自分にとって重いかどうかということだと思います。そういう意味で、飼育動物を飼っているうちに愛着が培われて、死なれたら悲しいと思うことで、命の重みを実感することだと思います。だから、ゴキブリであったとしてもそれを飼っている子どもがそのゴキブリに愛着があれば、そこでいささかも命の重みを実感するということだと思います。ただ、一般的には、コンパニオンアニマルは、人と目を合わせることができて、愛情を培いやすいということです。

先生は、学校では何を飼うことを勧めたいですか。

<後藤>

私は、教室内飼育が基本だと思っています。きちんとしたきれいな施設があればいいですが、それは難しいことだと思います。したがって、教室で飼育するということを考えたときに、やはり、魚類やザリガニなどが適当かと思います。

いろいろな学校を見てみると、教室内に1つ水槽があるだけで、教室内の雰囲気は全然違います。荒れた学校でも、教室内に水槽があるだけで、落ち着いた雰囲気になることを見ていますので、生命に直接かかわるということが大切なことではないかと思います。欲を言えばウサギなどのほ乳類を教室内で飼うことがよいのかかもしれませんが、それは難しいので、幼稚園で飼われているように、ロビーなどのスペースで飼うことが理想なのではないかと思います。

<滋賀・佐藤>

ケージなどに入れて、子どもたちの目につくところで飼うことが理想だということをおっしゃいましたが、私は、きちんとした飼育舎で、動物たちがのびのび暮らさせて、また、子どもたちともふれあえる場所がよいのではないかと思います。

私の学校では、飼育舎で飼っていたウサギが怪我をしたのをきっかけに、廊下でそのウサギを飼うことにしました。そうしたところ、今まで関心のなかった子どもたちも関心をもつようになり、そのウサギが死ぬまで、子どもたちにかわいがられていました。そんなことがあってから、子どもたちに人気のあるウサギを廊下につれてきて子どもたちとふれあわせるようにしています。そんなことから、飼育舎ばかりがふれあいの場所ではなく、廊下などでケージに入

れてふれあわせることも効果が高いと思いますが、狭いケージの中で飼うことによってウサギにストレスを与えてしまうのではないかということが心配です。そこで、どのような飼い方が一番理想なのかということについても話し合っていけばよいと思っています。

<中川>

飼育舎がいちばんのびのびしていて良いということは、動物に視点を当てたことだと思います。そうすると、子どもたちにとってみると、ふれあうことができないし、穴に潜って、ウサギを見ることもできないということになります。学校の動物は、子どもを成長させるために飼う動物というように考え方を決めて、愛玩動物とも家畜とも違う動物というとらえ方をして、より身近なところに置くことが基本だと思います。ただ、ケージに入れっぱなしだと骨が弱くなるので、掃除の時にだけでも30分くらいずつ走り回らせることが必要です。このうように、いろいろと細かいことも考えなければならぬので、獣医師と相談しながら飼育をしていただければと思います。

<福岡・森田>

福岡で動物病院を経営しています。

私はかつて保護司をやっていました。その経験から申し上げます。ご家庭で、できれば温血動物を飼ってあげてください。そうすると、非行少年非行少女は生まれません。非行少年や非行少女は、中学校になると必ずたばこを覚えます。ただ、たばこを覚えた子ども全員が非行に走るということではありません。しかし、動物の前でたばこを吸うと、必ず動物は嫌がります。そんなことに接すると、命の重みやぬくもりを感じられるようになります。だからこそ、温血動物を各家庭で飼っていただきたいです。

<中川>

各家庭で動物が飼えることが理想ですが、変えない家庭もあるわけで、ただ、動物を子どものために飼ってくれる家庭では非行少年は出ないかもしれません。

<神奈川・西>

厚木の小学校の教員です。

教室内で飼育しているときの課題は、その動物が誰の所有なのかということです。当事者ははっきりしなくなるのです。当事者がはっきりしている方が愛情が深まります。動物が誰の所有なのかということ。これがこれからの大問題だと思います。

<中川>

最近、暖かい体温のある動物を抱いたのは我が子が初めてだという若い母親が増えてきているそうです。せめて、大学の学生さんに暖かい体温のある動物とふれあう体験をたくさんさせてほしいと思います。